

若手の会だより

～夏学がもたらす地方の大学生への恩恵～

石坂優人

北海道大学大学院生命科学院 (M1)
X線構造生物学研究室

はじめに

2018年度より、若手の会北海道支部の支部長を務めている石坂優人と申します。といっても、北海道支部で運営側に所属している学生は今のところ私だけです。他の支部のように年に数回セミナーを行うなどの体制を整えるべく、今は生化学若い研究者の会北海道支部の皆様からノウハウを学んでいるところです。

最近の取り組みとしては、8月27日(月)より岐阜県で開催される「第58回生物物理若手の会 夏の学校」(以下、夏学)の広報がメインです。夏学に関してご存知ではない方は、前号の若手の会だより¹⁾または夏学の公式サイト²⁾をご覧ください。

今回の若手の会だよりでは、主に地方の大学に通っている学生の皆様に向け、私自身が夏学に参加してよかったと感じた経験談を述べさせていただきます。

進路選択の材料に

私は学部3年生の時に、北海道で開催された第56回夏学に参加しました。博士課程進学を視野に入れていたことから研究室選びに迷っており、その候補の研究室から加藤公兎先生(現在は岡山大学に所属)が分科会の講演者として来られていたことが理由でした。

構造生物学には以前から興味がありましたが、専門家の方々に直接お話を伺ってから進路を決めたいという気持ちがありました。しかし、地方の大学では所属大学以外の専門家の講演を聞くことができる機会はそう多くありません。特に研究室に所属する前の学部生ならなおさらです。もちろん、インターネットで関連論文を探したり、学内の図書館で文献を読んだりすれば、この分野の面白さや研究の方向性について知るこ

とはできますが、当時の私には専門的な内容を理解できる能力はありませんでした。

一方で、夏学は所属大学以外からも数多くの専門家が来られます。特に岩本裕之先生(高輝度光科学研究センター)の高速X線回折ムービー撮影に関するご講演では、放射光構造生物学の新しい一面を学ぶことができました。また、加藤先生の超巨大生体分子複合体の構造解析のご講演では、学内の授業では気づかなかった研究の奥深さを知る機会になりました。懇親会などで率直な疑問をぶつけることができたのもよかったです。

学部生から夏学に参加するメリットは昨年の若手の会だより³⁾でも言及されていますが、私自身も強く実感しました。学部生の知識で夏学を楽しめるか当初は不安でしたが、20名近くの学部生参加者に恵まれたこともあり問題はありませんでした。また、この夏学をきっかけに現在の研究室に所属することを決意しました。

学会発表の実践練習に

研究を始めてしばらく経つと学会発表の機会が増えてきますが、そのチャンスを活かすためには実践練習が必要です。しかし地方大学では、そのような場となる学生主催のセミナーはあまり多くありません。

夏学では、学生による口頭発表やポスター発表が行われます。私が初めて参加した第56回夏学は研究室に所属する前だったため発表できなくて当然でしたが、自費で東京に行った第57回夏学も発表を見送ってしまいました。あの時に発表を経験しておけば初めての学会や卒業発表の前哨戦になり、自分の研究に役立つ有意義な議論もできたのに…と今では後悔しています。この反省を活かし、今年の夏学ではポスター発表を行う予定です。



第56回夏学@北海道³⁾
夏学3日目、学部生だけで集まって将来について語り合った

異分野の研究を学び、専門性を高める機会に

研究を進めることで専門性を高めることはできますが、自分とは違った分野の研究も理解できるようになるのは難しいのではないのでしょうか。しかし専門的な内容を独学するには難易度が高すぎますし、異分野のセミナーに参加できる機会も多くありません。特に地方学生は、その意味で勉強しにくいと私は思います。

一方で生物物理の夏学は、構造生物学だけでなく、各種分光学、分子シミュレーション、非線形化学や非平衡統計物理学など様々な領域が含まれているため、異分野の研究を学ぶ場所としてピッタリではないでしょうか。

私が夏学に参加したのは学部3、4年生の時だったため、異分野の先生のご講演は専門的すぎて正直に言う理解できませんでした。しかし、その分野の研究をしている参加者の学生とのグループワークや懇親会を通して、異分野の研究で使われる手法や理論などを共有できたことは魅力的でした。この経験もあり、自分の専門性を間接的に伸ばすこともできました。

夏休みの息抜きや人脈形成の場に

学部時代から現在まで同じ研究室に所属されている方は、コミュニティが狭くなりがちではないでしょうか。実際に去年、一昨年と夏学に参加し、博士課程に在籍する先輩とお話したところ、「夏学は勉強になるし、たくさんの人と知り合えて息抜きにもなる。」というお話を伺うことができました。研究室の人にはなかなか相談できない悩みを共有し、励まし合うという懇親会的一幕もありました。

また、知り合った人とSNSで連絡先を交換したり、夏学後に会場周辺を観光したりしているグループもありました。実際に私も、過去2回の夏学で全国各地の様々な学年・研究領域の人と繋がることができ、「こ

の分野は〇〇先輩に聞けば安心」というような方々をたくさん知りました。

さらに、夏学には大学卒業後に就職予定の参加者もいれば、博士課程修了後に企業やアカデミアに進む方もいます。このように様々なバックグラウンドを持つ人達が集まる夏学は、地方大学に通う学生にとっては特に貴重な機会だと感じました。

地方大学生の夏学の参加費はそれほど高くない

とはいえ、地方の大学に通う大学生が夏学に参加するにあたり、参加費2万円に加えて交通費まで支払うことはかなり高いハードルだと感じるかもしれません。

しかし実際は、3泊4日で宿泊費も食事代も含まれていることや、途中から参加する人は料金が割引されることを考えると、むしろ格安とさえ言えるかもしれません。また、学部生は先着順で特別割引もあります。

さらに、夏学開催日の告知も3か月以上前に行われるため、大手航空会社の75日割を使えば交通費も比較的抑えられます。また、遠方からの参加者には旅費が支援されることもあります。去年の私の場合、旅費はほぼ無料で参加することができました。

まとめ:夏学は地方の大学生の強い味方

地方大学に通う大学生は地理的隔離のために、進路選択の材料となる出会いや学会発表の機会などを見つける際に特に苦労すると思います。しかし、「生物物理若手の会 夏の学校」ではそれらを補う環境が整っていると、私は実際に参加して痛感しました。少しでも興味を持った方は、参加してみることを強くオススメしたいです。

謝 辞

最後にこの場をお借りして、夏学の運営に関わって下さった全ての皆様に御礼申し上げます。特に、第56回夏学の校長を務めて下さった田宮裕治前支部長には支部長引継ぎの件で大変お世話になりました。また、工藤会長にはいつも助けられております。心より感謝申し上げます。数年後、北海道でまた夏学を開催することで、恩返しできればと思います。

文 献

- 1) 清水政宏 (2018) 生物物理 58, 114-115. DOI: 10.2142/biophys.58.114.
- 2) 生物物理夏の学校 2018年公式サイト. <http://bpwakate.net/summer2018/>
- 3) 落合佳樹ら (2017) 生物物理 57, 167-168. DOI: 10.2142/biophys.57.167.



第57回夏学@東京
1日目グループワークの様子